

ベートーヴェン：レオノーレ序曲 第2番 Op.72a

《レオノーレ》は、ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770-1827）の唯一のオペラ《フィデリオ》の作曲当初のタイトルである。権力者によって政敵として捕えられた夫フロレスタンを妻レオノーレ（男装した名がフィデリオ）が救出するオペラで、原作者のブイイはフランス革命下で実際に起こったできごとを題材にしたという。このオペラに代表されるように現実社会への批判がこめられた「救出オペラ」は、フランス革命やナポレオン戦争で混乱する当時の人々の共感を呼んでいた。

オペラ《レオノーレ》が初演されたのは1805年11月。皮肉なことに、かつてベートーヴェンが憧れ、今は皇帝という権力の座についたナポレオンとフランス軍がウィーンに駐留した時期と重なる。客席をうめるはずだった貴族や裕福な市民たちの多くが危険を避けて疎開していたことに加え、作品は第1幕が長過ぎるなどと酷評され、初演は失敗に終わった。そのためオペラは改訂を重ねていくことになる。序曲に《レオノーレ序曲》第1番～第3番と《フィデリオ序曲》の計4種類あるのもそのためである。複雑なので整理すると次のようになる。

①前述のとおり、1805年11月20日、オペラ《レオノーレ》（第1稿）がウィーンで初演された。その序曲が《レオノーレ序曲第2番》と呼ばれる。実際には最も早く作曲された。（なぜ第1番でないのかは③を参照）

②1806年3月29日、3幕から2幕に改作された《レオノーレ》（第2稿）がウィーンで初演された。その序曲が《レオノーレ序曲第3番》と呼ばれる。

③1807年、第2稿をプラハで上演する計画がもちあがり、そのための新しい序曲が書かれた。旧説では作曲年代が最も早いと考えられていたことから、そのまま《レオノーレ序曲第1番》として通っている。

④1814年5月23日、このオペラの第3稿が《フィデリオ》と題を変えウィーンで初演された。このオペラの完成版で、その序曲が《フィデリオ序曲》である。

本日は《レオノーレ》序曲の中で演奏頻度が高い第3番ではなく、最も早く作曲された第2番を演奏する。

力強いユニゾン（すべて「ソ」の音）による開始、それに続くクラリネットによるフロレスタンのアリア、活気に満ちた主部のテーマなど、基本的な素材は第2番も第3番も変わらない。だが、後半に主題の再現部や終結部を加えた第3番が完璧なソナタ形式をとるのに対して、第2番は再現部が省略されるなど形式が自由である。冒頭の力強いユニゾンが、第3番では1回だけだが第2番では2回繰り返されているので注目していただきたい。

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦5部、【バンダ】トランペット1

※スコア上の表記

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。